

校長会広報225号

発行・一般財団法人 宮崎県校長会館

編集・宮崎県校長会
広報委員会

「校長経験者」としての回顧 ～ 未来に向かうために大切にすべきこと ～

日向市教育委員会 教育長 今村 卓也

■いつの間にか年齢を重ねてしまった。

気づけば60代も最後の年。来年は古希を迎える。心は未だに元気だが、身体はそれなり。酒量も少しずつ減少し、代わりに病院通いの回数と飲む薬の量ばかりが増加している。時間のある待合室で様々なことを考えるが、行き着くところはいつも「教育」。

「この先教育はどんな方向に向かい、教職員にはどんなことが求められていくのか?」、「働き方改革は真に実現可能となり得るのか?」、そしてその先には、「これから先、子どもたちにはどんな方法で、どのような指導を行っていくことが必要となるのか?」といったことに対する答えが、導き出されそうな気がするが、闇は未だに明けることがない。

校長職に初めて就いてから、ちょうど20年目を迎えた。子どもたちに言い続けてきたことは、「過去を振り返るな、前を向いて前進し続けよ」、「思い出は、自分の成長と前進を確かめるときにのみ必要」ということであった。

過去の取組を確かめながら、今の時代に対応した取組を模索しているが、抱えている不登校や生徒指導上の問題は、内容や質は異なるものの、本質としては変わらないと感じることが多い。

全国初となる「施設一体型の小中一貫校」の開校当時、刹那刹那で校長としての想いを綴ってきた短い文章が、いくつも残っている。20年ぶりに読み返してみるが、今の時代に当てはまるものがほとんどであり、改めて「不易なるもの」を実感している。

◇ 魅力ある学校。小中一貫教育の推進。新しいブランドを創るような営みである。発想を変えなければ新しいものは見えてこない。しかし複雑なものは根付かない。簡単で明瞭で、それでいて取り組み始めたら確実に力が身に付く、そんなシステムを創り上げたい。

◇ P・D・C・A (Passion, Dream, Creation, Action) がなければ、教育に未来は来ない。全員のP・D・C・Aを結集できれば素晴らしい。

◇ それぞれの教職員の特色を発揮すること。互いに認め合い、尊重し合うこと。そんな気持ちを一

人一人が持ち続ければ大きな歯車が動く。自分も変わる。子どもも変わる。学校も変わる。その原点は校長自身が職員を認めることから。

◇ 教育って難しくはない。ただ愛すること。何が大切かと問われた時、「全ての先生方と全ての子どもたちをひたすらに愛し続けること」と自信を持って即答する。自分が愛さなければ誰も愛してはくれない。愛されて育った人は周りの人を愛し、大切にす。そしていつの日か自分が愛される。

◇ 保護者との関係も同じ。一人一人の保護者の立場も理解すること。相手に変わってほしければ、学校の考えを伝える努力が必要。相手を否定せず、認めながら、少しずつ話せば、必ず相手も少しずつ聞いてくれるようになる。それが信頼関係。

◇ 教師に対する信頼が得られなければ何も変えられない。「今年もまた1年間我慢しよう」とだけは言わせない。指導力って、指導技術と学級経営力を足したもの。もちろん学級経営力の中には情熱や熱意、深い教育愛がなければならない。

◇ 氷砂糖を1Kgも入れた梅酒は1年も経つと美味しく飲める。50gしか入れなかった梅酒は1年経ってもまずくて飲めない。しかしじっくりと時間をかけて3年も寝かせると、下手なブランデーよりはるかにコクのある味になる。子どもたちも同じ。時間をかけ9年間じっくりと育てること。

■20年前もこうやって、いろいろなことを考えながら、校長としての取組に日々向き合っていた。

県北の教職員の構成は厳しい。今年の日向市の教員構成は、10年未満の教諭が小学校約65%、中学校約55%であり、経験値としては不安が残る。それを指導し、カバーし、育てる努力をしなければ児童生徒に力はつかない。誰が指導するのか……。校長が中心になって育てるしかないではないか。力のある教職員配置要望の前に育てる校長でありたい。

全ての教職員を愛しながら、関わり育ててほしい。校長経験者としての回顧、「心のつぶやき」である。

「三毛入野命（みけいりのみこと）」に想う

日之影町立日之影中学校 藤田雅元

校長室から見える山々は目映いばかりの緑と真っ青な空である。遠くから鳥のさえずり、シカの鳴き声、草刈り機の音等が聞こえてくる。のどかな環境の中、「大人歌舞伎」や「深角団七踊り」等、多くの伝統文化が子どもへ継承されている。それと同時に先進的な「タブレット端末をはじめとするICT機器を活用した教育」や「学校・家庭・地域・行政が連携したキャリア教育」等が数多く見られる。まさに「不易」と「流行」が日々の教育活動となっている。子どもは、南北約30km、東西約9km、町土の91%を森林が占める町内から、8台のスクールバス、徒歩、自転車、送迎等で本校に通学している。中には約45分かけて徒歩通学する子ども、山や谷を越えスクールバス乗り場まで来る子どももいる。通学に子どもはもちろん家庭も労力を要するのである。そのような子どもの姿を見ていると、子どもが背負っている通学鞆の中に入っているものの重さを

考える。学習で使用する教科書やノート等はもちろんのこと、もっと大切な何かはその通学鞆に詰まっているに違いないと思えてくる。その大切な何かを叶えるための力を培うことは、学校の最高責任者としての「責任」、そして強い「覚悟」が必要であることを「自覚」する。「自覚」するだけではなく、「行動に移すこと。」がまさに私に課せられた「使命」であり「リーダーシップ」でもある。僻地校の強みをいかした教育を展開することこそ、日之影町を担う人材育成に寄与すると信じている。神話の中で「三毛入野命」が「日の光」を射したことを由来とする「日之影町」。家庭・地域・行政と一体となり「教育の光」で、日之影を誇りに思う子どもたちをその神話のように照らしていきたい。



「ホタル」と「中学生」の話（環境が人を育てる）

国富町立八代中学校 窪田雅文

平成9年4月に私は延岡市北浦町にある三川内（みかわうち）中学校に赴任した。三川内は、周囲を山と清流に囲まれた自然豊かなところであった。5月末から6月上旬にかけて地域を流れる川に沿って、夜には何千匹ものホタルが乱舞するのが見られる。私が赴任する約20年前（今から約45年前）からホタルの研究を続けている学校であった。そして生徒たちは、ホタルが舞う時期にホタルの数を数える「ホタル調査」ということも毎年定期的に行っていた。赴任当時、生徒・保護者・地域の方の誰もが「昔と比べホタルの数が減った」という話をされた。また、工事や台風・大雨の影響で川は汚れ、川の状況は大きく変わり、ホタルの数は年々減少していた。そんな状況を見た生徒たちは、「私たちに何かできることはないか」と考え、生徒会を中心に話し合いが行われた。「川をきれいにしよ

う！」「川を掃除しよう！」という声が上がった。全校生徒20数名程度の学校で、「生徒たちだけで本当にできるのか？」と思ったが、生徒の実行力は私の想像を超えていた。生徒全員が水着を着て、ゴーグルや水中めがねを着け、川の中に入って、川底にあるゴミを拾うのだ。そんな状況を見た地区の人々が、次の年から一緒に協力して活動を行った。生徒の「ホタルを増やそう！」「川をきれいにしたい！」という気持ちが、清掃活動に結びつき、今では、毎年三川内地区の恒例行事になっている。活動が始まり26年が経ち、当時の教え子が親になり、その子がまた同じ活動をしている。「環境が人を育てる」という言葉がある。三川内という環境があったからこそ「地域愛」が育ち、このような活動が生まれたのではないかと思う。教員生活で出会った記憶の1ページである。

「何を、どう伝えるか？」

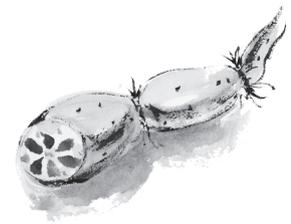
南郷中学校 本 部 圭一朗

校長という立場になって、人の前で話をする機会が増えた。始業式や終業式での「校長の話」、会の冒頭やまとめの話。はたまた、結婚式での「新郎の職場の上司であります…」というのもその一つだ。かつて先輩から、「集会で、テーマは何でもいいから10分間話して」と突然ふられ、10分以上話していた。たまに会う同窓生が、「人前で話をするのは、何歳になっても緊張する」と、こちらを見てよく口にする。そのとき、さして苦にしていない自分に、気付く。

とりわけ「校長の話」については、自分自身が心がけていることがある。一つ目は「3分を目安に、簡潔に」である。「この人の話は、シンプルで聞きやすい」と印象付けるねらいだ。二つ目は「印象に残りやすいキーワードを盛り込むこと」である。私の人生訓でもある「過去は変えられない。未来はどうなるか分からない。だから、今を全力で生きる。」という言葉は、東日本大震災から私自身が学んだ考

えであり、全校生徒に折に触れ話している。とは言え、未来ある子どもたちだから、「今を大事に生きれば、未来を変えることができる」と鼓舞している。昨年遅刻の多かったある男子生徒が、今年は定時に笑顔で登校し、「今は学校が楽しい！」とメッセージノートに書いていた。さらに、毎朝登校できている理由について、「校長先生が言っていた『今を大事に生きれば、未来を変えることができる』のおかげです。未来を変えることなんて簡単やった！」と書かれてあった。感じて動いて、今がある。嬉しい出来事である。

心を揺さぶるために「何を、どう伝えるか？」そう考えると、楽しくもあり責任もある。未来に希望がもてるポジティブワードで、みんなが幸せになる「話」を心がけたい。



支 会 だ り

< 西臼杵支会 >

高千穂町立高千穂小学校 榎 本 英 雄

西臼杵支会は、高千穂町（小学校5校、中学校2校）、日之影町（小学校3校、中学校1校）、五ヶ瀬町（小学校4校、中学校1校）の3町、計16校で構成されている。西臼杵地区は、熊本県と大分県に隣接し九州山地のほぼ中央部に位置しており、近隣の諸塚村、椎葉村と共に世界農業遺産（GIAHS）に認定されている。伝統的な農業や農村文化・景観、生物の多様性など、児童・生徒が学ぶ上で魅力的な素材が豊富な地域である。

その一方で、人口減少や少子高齢化など中山間地域の問題を抱えており、保護者や地域住民にとって、地域の将来を担う児童・生徒を育成する学校教育への期待はとても大きい。

そのため各学校では、総合的な学習の時間等の中で、各校の特色に応じ児童・生徒の将来を見据えたキャリア教育、地域学習が展開されている。

そのような背景のもと、昨年度の西臼杵郡校長会研修会では、校長としての見識を広げ中山間地域における地域学習を更に充実させることを目的に講演

会を開催した。講師は、高千穂郷の椎茸生産者を守るために椎茸を使用した商品を開発し、県内外及び海外へ展開している株式会社杉本商店代表取締役の杉本和英氏である。その際に「失敗を成功に繋げるためのタフさが大事」「倒れる時は常に前に、柔軟かつしなやかな対応で、少しでも前に」など、印象的な言葉をいただいた。この言葉は、児童・生徒の生き方のみならず、私たち校長が学校を経営する上でも通ずるものを感じることができた。

保護者、地域住民、行政や企業にとって、児童・生徒は未来を担う大切な宝であり、私たち教職員も同じ思いを抱くとともに、その期待に十分に届けていきたい。今後とも、西臼杵支会では、信頼される学校づくり、郷土を愛する児童・生徒の育成のために、校長が互いに支え合い、一丸となり中山間地域の教育の充実に寄与する所存である。



< 宮崎支会 >

宮崎市立高岡小学校 金丸 恭 浩

宮崎支会小学校長会は、宮崎市立小学校47校、宮崎大学教育学部附属小学校1校、国富町4校及び綾町1校の計53校で構成されている。年間5回の研修会を基本とし、県校長会理事会報告や県研修委員会、人給委員会、広報委員会からの報告、全国、九州、県校長会の研究発表内容の協議、学校運営に関する課題研修（講話、グループ協議等）などを中心に研修を深めている。

昨年度より新型コロナウイルス感染症が季節性インフルエンザなどと同じ感染症法に規定される5類感染症に移行され、各学校ではPTA活動や学校行事も少しずつ以前の状態に戻りつつあるところである。しかしながら、学校における働き方改革と地域の思いや保護者の多様な考え方から対応に苦慮する場面も多々見られる現状もある。

前述したように本支会では、7月26日に行われた宮崎県小学校長研究大会の発表内容について検討

を行ってきた。「安全教育・防災教育の推進及び危機への対応」「豊かな人間性と健やかな体を育むカリキュラム・マネジメント」「社会形成能力を育む教育活動の推進」「これからの学校を担うリーダーの育成」の4つのグループに分かれて、より良い発表になるように協議を重ねてきた。どの主題も、現在学校が抱える問題点であり、発表者だけの問題ではなく、それぞれの学校に重ねながら当事者意識をもち、ともに考えることができた。また、発表内容に合わせてそれぞれの学校での課題や悩みを出し合う場面も見られるほど深まりを見せ、7月26日の県校長研究会では内容のある提案をすることができた。

今後も校長同士のコミュニケーションを図り、市や町教育委員会との連携も深め、様々な懸案に対して情報共有を図り連絡を密に取りながら、子どもたちが安全安心に通える学校づくりを目指していきたい。

< 日南支会 >

日南市立北郷小中学校 若林 史 宏

日南市は、歴史と自然あふれる観光の街である九州の小京都と呼ばれる飴肥や風光明媚な日南海岸国定公園などを擁し、太陽と海、緑の山々に囲まれた自然豊かな土地である。

また、本市は、明治時代を代表する外交官「小村寿太郎」の命日を「振徳教育の日」とし、各学校でふるさと日南を学ぶ学習を展開するなど“人づくりこそがまちづくり”という考えのもと、新時代を生き抜く「4つの学ぶ力」を身に付けた子どもの育成に取り組んでいる。

日南支会は、「日南市立小中学校の校長相互の連絡調整を図り、円滑な学校運営及び特色ある学校づくりを推進するとともに、研究活動を通して、校長として識見と資質の向上を図る」を目的として、小学校15校、中学校9校、計24校（小中一貫校3校を含む）で構成されている。本年度は、8名の転入者が加わり、日南市の生涯学習センター「まなびピア」を中心に年間7回の定例会が実施される。また、本支会は日南市退職校長会と毎年合同研修会を

実施し、情報を共有しながら連携を深めている。

定例会では、前半に小中合同の全体会、後半は、小中学校別の研修会を行っている。全体会後の中学校部会には、情報交換の目的で串間市立串間中学校も参加している。

全体会では、毎回、県校長会理事会報告が会長からあり、その後に各専門委員会の報告がなされ、次に諸課題について協議を行う。小中別の研修会では、県校長研究大会に向けての研究や学校運営上の課題など何でも相談できる和やかな雰囲気での協議が行われる。

本支会の特徴は、何より雰囲気がよいところである。各学校抱える悩みはそれぞれ多岐にわたるが、課題解決に向けて気兼ねなく相談し合える、懇親会には毎回ほぼ全員の参加がある温かい支会となっている。



編集後記

8月8日に日向灘沖で発生した地震ならびに8月末の台風10号の接近により、お怪我や学校・住宅の損壊など、様々な被害にあわれた皆様にご心よりお見舞い申し上げます。

さて、ここに校長会広報紙225号をお届けいたします。日向市教育委員会教育長の今村卓也様には、御多忙の中、特別に御寄稿いただきありがとうございます。また、西白杵・宮崎・日南支会の執筆者の皆様、集約・校正に当たってくださった各支会の広報委員ならびに常任専門委員の皆様方にも感謝申し上げます。

最後に、各学校では様々な課題への対応を余儀なくされる状況があるかとは思いますが、校長先生方におかれましては、くれぐれも御自愛のほどお祈り申し上げます。